

三浦哲郎

愛^{いと}しい女^{ひと}



浦哲郎
愛しい女



新潮社版

愛いとしい女ひと

著者 三浦哲郎（みうらてつお）

昭和五十四年四月二十日 発行

昭和五十四年八月十五日 七刷

発行者 佐藤亮一

印刷所 株式会社光邦 製本所 大口製本株式会社

発行所 郵便番号一六二
東京都新宿区矢来町七十一番地

株式会社 新潮社

電話 業務〇三（三）五一一 編集〇三（二六六）五四一一

定価 九八〇円 振替 東京四一八〇八

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

愛しい女

装帧／司
修

吊橋

高子の太腿に耳を当てると、ごうごうと川の流れのような音がきこえた。

最初は、耳たぶが浴衣にすれる音かと思つたが、そうではない。耳をちつとも動かさなくても、依然としてその音がきこえる。

まるで妻の軀のなかを川が流れているみたいだ、それも谷川みたいな急な流れだ、と目を閉じたまま清里浩三は思つた。

「ちよっと、ごめんなさい」

耳の下で高子の太腿が動いた。重そうなので、清里はちよっと頭を持ち上げてやった。

「はい、もういいの。どうぞ」

また耳に、妻の川音が戻ってきた。

「どうしたんだ」

「ちよっと、脚がね」

「しびれたのか」

「近頃、こうして膝を折って坐ることなんか、めつたにないから。それに、あなたの頭もなんだか前より重たくなつたみたいよ」

「重たかったら、よそうか」

「いいのよ。このまま、じつとしていて」

高子は、両手で軽く頭を抑えつけるようにしている。清里は、思わず笑つた。

「逃げやしないよ」

「本当？ 動いちゃ駄目よ」

「わかつてるよ」

「動いたら、痛い思いをするんだから」

高子は、そういつてから、急いで、

「痛いときはそういつてね、なるべく痛くないようにするけど」

「いい足した。」

「いちど痛くしたら、それまでだよ」

「いいわ。ただし、痛くないのに痛いなんていつたら厭よ」

「そんなずるはしない」

「それに、あなたが動いて痛かったときは、ノーカウント」

ね」

おかしな女だな、と清里は、自分の妻のことをそう思った。高子は、家族で旅行に出ると、どういうものか、きまつてみんなの耳垢を取りたがる。旅の宿にくつろぐと、さつそく旅行鞆から耳搔きを取り出して、さあ、いらつしやい——まず、子供たち、九つになる長女の夏子、七つになる長男の一也、四つになる次男の武志という順に取つてやつて、それからこちらの番になる。高子は、いそいそと取り掛かり、じつくりと取りつづける、まるで家族旅行の醍醐味はこういうところにあるのだと思ひ込んでゐるかのよう

に。
どうして妻が旅先でそんなに家族の耳垢を取りたがるのか、清里にはわからない。よその妻たちも、こうだろうか。宿の浴衣ゆかたを通して伝わってくる妻の軀からだのぬくもりで、清里の頬が熱くなつてきた。妻の軀がこんなに音を立てて騒いでゐるのは、ここの温泉に漬かりすぎたせいかもしれない。

目をつむつたまま、そんなことをぼんやり考へてゐると、高子が不意に、

「あ、みつけた」

といった。

その子供じみた嬉しげな声を聞くと、清里は笑い出さず

にはいられなくなる。

「大きいのか」

「耳垢じゃないの」

「じゃ、なんだ」

「白髪しらが。もみ上げのところに、一本、二本、三本……」

と高子は数えて、くすつと笑つた。

「全部で五本あるわ」

「五本？　五本や六本じゃ、きかないだろう」

「あら、知つてたの？」

「毎朝、鏡の前で髭を剃るからな、厭でも目につくさ。右

と左で、二十本近くある」

「そんなに？」

「指で搔き分けて探せばの話だ。まだ短いから、ほとんど

目立たない」

「そうよ、私だって気がつかなかったもの」

高子は、耳の方はそちのけにして、指先でもみ上げを

撫でている。

「いつから生えてたのかしら」

「さあね。気がついたときには、もう何本も生えてたから」

「それを、私に隠してたのね？」

「べつに隠していたわけじゃないよ。白髪のことまで報告するの、奥さん、どうとう生えましたって」

高子は、まったくずっと笑って、咳くように、
「あなたのことは、なんでも知っておきたいから」といった。

清里は、黙っていた。朽ちかけた軒端から西日が洩れてくるらしく、目をつむっていても臉が明るい。

「はい、こっちはもういいわ。今度は反対側」

太腿の上で寝返りを打つと、柔らかな腹に鼻が埋まった。湯の花の匂いがする。妻の肌が匂うのか、浴衣が匂うのか、わからない。

「あら、ほんとだわ。こっちの方が多いくらい」

高子は、ちょっと耳を覗いただけで、すぐ、白髪のことをそういった。

「すこし早いんじゃないかしら」

「そんなことはないよ。もう四十だもの」

「まだ三十八」

と、高子は子供を叱るときの口調でいった。

「三十八も四十も、似たようなもんさ」

「ちがうわ。大ちがいよ。どうしてそんなに早く齢をとりたがるの？」

こちらとしても、べつに早く齢をとりたいわけではないのだが、と清里は思ったが、面倒なので黙っていると、
「でもね、私、正直いうと、ほっとしてるの」

と、笑いを含んだ声で高子がいった。

「僕に白髪が生えたからか」

「そう。私の方が先になったら、どうしようと思ってたから」

「白髪の話はもういいよ。耳の方はどうなってるんだ？」

耳掻きがさっぱり働かないじゃないか」

「そうなの。耳垢がないのよ、珍しく」

「なかったら、もう、やめにしてくれよ」

「ちょっと待って」

と、高子は持ち上げようとした清里の頭を抑えて、

「これからどこかへいくの？」

「岩魚を釣りにね。ここのおやじさんが案内してくれるんだって。一也は？」

「母屋の庭にいるんじゃないかしら、三人で。鯉にやるんだってビスケットを持ってきたから」

それから、不意に高子は、

「怪しいぞ」

と清里の肩をゆさぶった。

「怪しい？ なにが？」

「耳がこんなに綺麗だなんて」

首をねじって見上げると、高子はちょっと頬をふくらませて睨んでいる。清里は笑い出した。

「おかしなことをいうんだな。耳垢がないと怪しいのか」
「だって、いつもはたくさんあるのに。いつだって、びっくりするようなやつを取ってあげるじゃない。ところが、きょうは全然ないのよ、どっちの耳にも。粉もないの」
「なかったら、ないで、いいじゃないか。そんなこともあるんだよ、人間の軀には」

すると、高子は、

「ま、とぼけてる」

と地団駄を踏むように腿をゆきぶって、

「やい、白状しろ」

「なにを？」

「ここへくる前に、誰かに取って貰ったんでしょ。耳を綺麗にしてくれる人が、どこかにいるんだわ、きつと」

馬鹿な、と清里がいう前に、高子は素早く両手で彼の目と口を覆ってしまった。

「顔をみちゃあ、駄目。なんにもいわなくていいの」

わざわざ顔をみなくても、清里には最初から妻が冗談をいつているのだとわかっていた。もし本気で疑っていたら、こんなふうに出したりはしないだろう。

そのまま黙っていると、遠くから子供の叫び声がきこえる。それが、長男の一也の声に似ていた。東京ではなんとなく手足を縮めるようにして暮らしている一也が、谷間に

裾でも呼ぶつもりなのか、思い切り大きな声でなにか叫んでいる。

軒端から洩れてくる日が、高子の手の甲まで伸びているらしく、目を覆っている指の輪郭が、綺麗な桃色にみえた。
「……おい」

と、清里は塞がれた口でいつてみたが、高子は返事をしない。それで、口を覆っている手のひらにちよつと歯を立ててやったとき、突然、部屋の外廊下の下の方から、

「お父さん……お父さん、早く」

という一也の甲高い声がきこえてきた。

「ああ、お迎えがきちゃった」

高子は、やつと諦めたように手を離した。

「お父さん、早くしたら……」

せつかな一也は、焦れている。

清里は、はずみをつけて立ち上ると、浴衣の帯をほどきながら前の廊下へ出ていった。すると、一也は墮下の庭先にしゃがんで、肩で激しく喘ぎながらこつちを見上げていた。その顔が、まるで水を浴びたような汗であった。清里はちよつとびっくりした。

「そんなに汗をかいて。どこから駆けてきたんだ。お姉ちゃんや武志は？」

そういうながら、太い手すりに掛けて置いたタオルを丸

めて、

「ほら、抛るぞ」

けれども、一也はしゃがんだまま、受け取る姿勢もとらずに、

「そんなの、要らない。早く、いってよ」

と喘ぎながらいった。

きてよ、というのならわかるが、いってよ、というのが、おかしかった。

「いくって、どこへ？」

「吊橋へだよ」

そういった口がみるみる平べったくなったかと思うと、一也は声を放って泣き出した。

不吉な影のようなものが、清里の胸をかすめて過ぎた。

吊橋というのは、この温泉宿の前を通っている古い街道の庚申塚のところから脇道へそれて、だらだら坂を二百メートルほど下ったところにある、高くて長い吊橋のことだ。

去年の春、若いカメラマンを連れて初めてこの村を訪ねたとき、清里はいちどこの吊橋を独りで渡ろうとして、渡れなかった。歩いているうちに、足元が次第に大きく波打ってきて、まんなかあたりで立ち竦んでしまった。

そのとき、覗くまいとして、つい覗いてしまった谷底に白く泡立っていた急流が、いま清里の目の下を流れて、そ

こにうずくまっている一也を忽ち呑み込んだ。

「吊橋へ？ どうして吊橋へいくんだ？」

一也は、しゃくり上げながらなにか言おうとしたが、平べったくなった口がいうことをきかない。いちど飛び過ぎた影のようなものが、また清里の胸に戻ってきた。

夏子や武志が一緒でないのは、どういうわけか。

「おい、高子、吊橋でなにかあったらしいぞ」

清里は、急いで部屋へ戻った。けれども、高子は部屋にはいなかった。こんなときに、どこへいったのだろう。

「おい、高子、どこだ？……」

つい、自分の家だと錯覚して、大きな声で呼びながら手早くジーンズを穿いていると、

「あなた、ここよ、こっち」

と、思いがけなく、一也がいる庭の方から高子の声がかこえてきた。

清里は、まだ脱がずにいた浴衣の裾をひるがえして、また手すりのところへ出ていった。高子は、一也の手を引いて、急いで庭から出ていくところだった。一也は腕を長く伸ばして、前へつんのめりそうになっていた。

「あなた、早く吊橋へ……」

「うん、どうしたんだって？」

「武志が、橋の途中で動けなくなってるらしいの」

「なに、武志が？」

と、清里は驚いて目を睜はなった。

「そうなの。夏子が、落ちないように見張ってるんですけど、橋のたもとで」

「落ちないように……」

清里は、足元が急に波打ったような気がして、思わずすりに握にぎまった。

大人の自分でさえ、途中で立ち竦こんでしまった吊橋である。あの揺れ方では、四つの子供など、簡単に目を廻まわしてしまうだろう。目を廻まわすどころか、振り落とされてしまうかもしれない。それを九つの子供が橋のたもとで見張っていたって、なんにもならない。

「なんてことを……。武志だけが吊橋を渡ったのか」

「そうらしいの。夏子もこの子も気がついたときには、もう大分むこうまでいってたんですって、独りで」

清里は、部屋へ駆け込むようにして浴衣を脱ぎ捨てると、裸の頭に長袖のＴシャツをかぶりながら部屋を出た。そのまま階段を駆け降りていって、玄関の土間で運動靴を履いていると、帳場から宿の主人が出てきて、

「そんな靴じゃいけんね、山は」

といった。

「いや、吊橋なんだ。ごめんなさい」

清里は早口でそういうと、主人の顔もみずに外へ走り出た。

朽木の門を出て、すぐのところで、一也の手を引きながら浴衣の裾を乱して急いでいる高子に追いついた。

「先にいってください。急いで」

「そうする。一也、おいで」

一也はもう泣きやんでいたが、母親に似て色白の顔が、汗と涙と埃でまだらに汚れていた。その顔を走りながら突き放すようにみて、

「どうして吊橋の方までいったんだ。危いから近づいちゃいけないっていったらう？」

いまさら、そんなことをいったところで仕方がないことはわかっていたが、清里は、そういわずにはいられなかった。吊橋のことは、ここに着いた晩に野天風呂でそういう聞かせたはずだったが、子供たちは、もうすっかり上の空になっていたのだ。

「だって、お姉ちゃんがね」

と、一也が遅れまいとして息を切らしながらいった。

「夏子が、いこうといったのか」

「ちがう。よそのお姉ちゃんたちがね、一緒に花を摘つみましようって、そういったから」

それで、三人はなんとなくその若い女たちと一緒に歩い

ているうちに、いつのまにか吊橋のたもとまできてしまったのだろう。

こんなところで路傍の花を摘んだりするのは、都会からきた客にきまっている。はしゃぐのはいいが、余計なことをしてくれては困る。清里は、その女たちに腹を立てた。

「武志は？ 吊橋の上でどうしてる？」

「坐ってる」

「坐ってる？ お尻を突いて？」

「そう。脚をひらいて」

清里は、いくらかほつとした。そんな坐り方をしているのなら、揺れに振り落とされることは、まずないだろう。武志は、歩けなくなつて、自分から坐り込んでしまったのだ。それが、かえつてよかった。そう思っていると、

「お姉ちゃんがね、そうしなさいっていったから」と一也がいった。

「その、よそのお姉ちゃんか？」

「うちのお姉ちゃんが」

そうか、夏子は適切な注意をしてくれたわけだ、と清里は思い、それにしても、一緒だったという若い女たちはどうしたのかと思つた。幼い子が途中で立ち往生しているのに、助けてくれようとしなかったのか。

けれども、清里はもうひどい息切れで物がいえなくなつ

ていた。庚申塚から脇道へ入ると、あとは下りで、加速度がついた一也にみるみる引き離された。

「おい……ちょっと待て」

清里は、辛うじてさういうと、のけぞるようになって走るのをやめた。心臓が胸いっぱい躍っている。こんなところで、こつちが倒れてしまったら、みつともない。彼は拳で胸を叩きながらそう思った。

「どうしたの？ もうすぐだよ」

わかつている、と彼は頷いてみせながら、口のなかのねばっこい唾を集めて、目をきつくつむつて飲み込んだ。

「おまえ、先にいって、武志がまだ吊橋の上にいるかどうか、みてくれ」

合点、と走り出す一也を、おい、待てと呼び止めて、

「武志がいたら、手を振りながら戻っておいで」

それだけいうと、坂の途中にうずくまってしまった。

なんて、まだ、と清里は自分を情けなく思つた。たったこれだけの駆け足で、へこたれるなんて。いつのまに、こんなに軀がなまってしまったのか。

清里は、婦人雑誌『月刊女性』の編集部で読物担当のデスクをしている。普段は走ることはおろか、急ぎ足で歩くことも滅多にしない。

坂を駆け降りていった一也が、ゆるい曲り角のところ

立ち止まると、そこから吊橋がみえるのだろう、こちらを振り向いて手を振った。武志はまだ吊橋の上にいるのだ。

「……よかった」

と清里は呟いて、立ち上った。つづけて独り言が出た。

「そうだろう。滅多に落ちやしないんだよ」

けれども、ついさっきまでは、ひょっとしたらもう間に合わないのではないかと彼は思っていたのだ。

歩き出すと、下りだからひとりでに小走りになる。足が軽くなっていた。

「前みたいに、坐ってるか？」

「うん、坐ってるよ。でもね、吊橋が揺れてる」

どうしたのだろう。武志が坐っているのなら、橋は揺れないはずなのに。そう思いながら、一也が立っているところまで駆け降りていってみると、なるほど、坂の下から谷間へ伸びている吊橋のたもとに夏子がひょろりと立っていて、そこから十五メートルばかりの橋の上に、武志が両脚をひろげて坐り込んでいるのがちいさく見え、その橋のどこかが軋んでいるのが、なにか小鳥の鳴き声のようにきこえていた。

橋がなぜ揺れているのかは、すぐにはわからなかったが、武志をみると、清里は不思議に気持が静まった。

「よし、ゆっくりいこう。走っちゃいけない」

彼は、一也の背中に手のひらを当てて、ゆっくり坂の残りを下りはじめた。

「お父さんがあわてて駆けつけたりすると、お姉ちゃんや武志もあわてるからな。武志は立ち上って駆けてくるかもしれない。足がもつれたり、軋んだりしたら、もうそれまでだ。だから、ゆっくりいかなくっちゃ、なんでもなさそうな顔をして……」

半分は自分にいい聞かせるように、そういいながら、ゆっくり坂を下っているうちに、橋の上の武志のむこう、こちら岸から三分の二ほどのところで、女が二人、立ってみたり、しゃがんでみたりしているのに、清里は気づいた。

橋が揺れているのは、その女たちのせいらしい。

「あれは？ ああ、橋のずつとむこうにいる人たちは？」

「ほら、さっきまで一緒だったお姉ちゃんたち。先に渡ってったけど、戻ってこれなくなっちゃったの」

清里は、思わず舌うちした。すると、それがきこえたかのように夏子が振り向いて、

「あ、お父さん」

といった。

清里は、急いで、いけないと手を振ったが、すでに武志も気がついていて、案の定、両手を橋板に突いて立ち上ろうとした。

「武志、立っちゃいけない。そのまま、じっとしてて。もう大丈夫だよ。お父さんがきたから、もう大丈夫だよ」

清里は、大声でそういったが、やはり坂を下ると、つい小走りになった。

武志は、橋のたもとに立った父親をみると、ほっとした拍子に、大ベそをかいた。すると、すぐに夏子が、

「泣かないで。泣いたら、知らないわよ」

と母親の口調を真似ていった。

夏子は、父親がくるまで、絶えずそんなことをいって弟を励ましていたのだろう。

「そうだ、泣いたりしちゃいけない。いま、お父さんがそこへいくからね。それまで、そこでじっとしてるんだ。いいね？」

清里は、武志にそう念を押してから、

「おい、その女の人」

と、橋の上の二人連れに声をかけた。

「ちょっと、じっとしててくれませんか。橋を揺らさないで……子供が動けなくなってるんだ」

二人連れは、顔をこちらに向けてしゃがんだまま、動かなくなった。揺れが、だんだんおさまってきた。

「……よし」

清里は、ゆっくり橋を渡っていった。武志は顔を歪めて、

小刻みにしゃくり上げている。

「ほうら、もう大丈夫だ。よく我慢したな。偉いぞ」

清里は、武志の前に背中を向けてしゃがむと、両手をうしろへ廻して武志の軀を掴まえた。

「さあ、そっと立って。お父さんにおんぶして」

清里は、武志を背負うと、またゆっくりと橋のたもとへ引き返した。そのときになって、やっと高子が坂を駆け降りてきた。夏子が、迎えにそっちへ駆けっていく。

「……ああ、よかった。馬鹿だよ、武志は」

と一也がいったが、清里は黙って武志を地面に下ろした。途端に、武志は泣き出した。それでも清里は、黙って、泣きじゃくる武志を見下ろしていた。

高子が駆け寄ってきた。

「よしよし、もう泣くことないでしょう。よく頑張ったわね。よかった、よかった」

高子は、武志を抱き上げると、踊るように踵かかとをかわるがわるうしろへ跳ね上げながら、くるくると廻った。

また吊橋が軋みはじめた。そのちいちいという小鳥の声に似た音で、清里は我に返った。

「どうも有難う」

橋の上に立ち上っている二人連れに、そうやって手を振ると、

「すみませーん」

という声が返ってきた。

「あたしたちも、歩けないんですう、目が廻りそう。助けてくださいあい」

清里は、振り向いて高子と顔を見合わせた。

「あの連中に誘われて、こんなところまできちゃったんだよ、この子たちは」

「まあ……でも、困ってるらしいわ。助けてあげたら？」

「助けるったって、僕はヘリコプターじゃない」

それでも、清里は両手で口を囲うと、

「一人ずつ、そろそろと歩いていращい。二人一緒だと、揺れが大きくなるから。脇見をしないで、ゆっくりゆっくり歩けば大丈夫ですよ」

その声が谷間に響き呼んだ。

橋の上の二人は、ちよつとの間、顔を寄せ合っていたが、やがて一人がしゃがむと、立っている一人が手を振りながら叫んだ。

「じゃ、そっちへいきますから、よろしくお願いしまあす」

ふと、その声に、聞き覚えがあるような気がしたが、
「よろしく、だって」

清里は、また高子を振り返って笑った。

「あなたを頼りにしてるのよ」

と高子も笑って、泣きやんだ武志を地面に下ろした。

「頼りにされたって、僕にはなんにもしてやれないよ」

「ここでみていてあげるだけでいいのよ。それだけで、なんとなく心強いんだわ」

清里は、舌うちした。

「甘ったれてるよ、こっちの迷惑も考えずに……」

「でも、このまま見捨てて帰るわけにもいかないでしょう？　ここにいてあげたら？」

清里は、鼻で強く息をした。

「しよがない。おまえたちは先に帰ってていいよ」

「あたしはお父さんと一緒にいるわ」

と好奇心の強い夏子がいった。

「そうくると思った」

と高子は笑って、

「じゃ、お先にね。しっかり誘導してあげて」

誘導といっても、橋は一本道である。その一本道を、最初の一人が、まるで丸木橋でも渡るように両手をひろげて、軀の平衡を保ちながら、そろりそろりとこちらへ歩きはじめていた。両手に一つずつ持っているのは、どうやら脱いだ自分の靴らしい。デニムの長目のスカートが、頼りなさそうに揺れている。

橋がすこしずつ揺れてくると、女も揺れて、白いブラウスの胸元でネックレスが光る。女は、ちいさな悲鳴を上げて立ち竦む。

「大丈夫、大丈夫」

と清里は声をかけてやる。

揺れが静まるのを待って、女はまた歩き出す。

「その調子、その調子……」

女は、さっきまで武志が坐り込んでいたあたりまでくると、不意に、あら、とこちらへ目を瞪るようにして立ち止まり、それから、

「厭だあ」

と白い歯をみせて、いきなりそこにしゃがんでしまった。

清里には、女がなにが厭なのかわからなかった。思わず夏子と顔を見合わせると、夏子はちよつと首をすくめて、

「武ちゃんの真似してる」

といった。

武志の真似をしてそこへしゃがめば、迎えがくると思っているのだとしたら、大間違いだ。それで、

「どうしたんです？」

と無愛想に声をかけると、女は頭を低くして、くすつと笑った。

「清里さんじゃありません？ 編集部の」

清里は驚いて、目をまるくした。そういわれて、よくみると、女は社の電話交換手をしている芹沢妙子で、

「なんだ、妙ちゃんじゃないの。どうしてこんなところに……びつくりさせるなあ」

と清里はいった。

道理で最初から、どこかで聞き覚えのある声だと思ったのだ。どこかどころか、芹沢妙子の声なら社で毎日のように聞いている。

けれども、声を聞けばかりで、本人と顔を合わせることには滅多になかった。妙ちゃんなどと気易く呼んでいるが、ただ声と親しんでいるだけで、面と向かつて話したことは、もしかしたらこれまでいちどもなかったかもしれない。それで、清里には、相手の顔をよくみるまでは、それが芹沢妙子だとはわからなかった。

「厭だわ、あたし……」

と、妙子は恥ずかしそうに首をすくめて、立とうとしない。笑っているから、もう恐怖心はなくなっているのだろう。

「なにをいまさら……」

と、清里も笑っていった。

「もうすこしじゃないの。早くおいでよ」

「じゃ、ちよつとむこうを向いてください。もう独りで大丈夫ですから」

清里は、なにか一言いつてやりたかったが、そのまま黙って橋に背を向けた。

「……知ってる人？」

と夏子がいった。

「うん。お父さんの会社のね、電話の交換手さん」

「厭だわって、どうしてなの？」

「恥ずかしいんだろう、吊橋でふらふらしてるところなんかを、知ってる人にみられるのが」

いい齡をして、と、もうすこしで彼は口に出すところだった。妙子の正確な齡はわからなかったが、そろそろ三十、ひよっとしたら三十を越しているのかもしれない。

「ああ、よかった。どうも、すみませんでした」

そういう声で向き直ると、

「こんにちは。びっくりしちゃいましたわ、まさかこんなところにいらっしやるとは思わなかったから」

と、妙子が靴を履きながらいった。

それは、清里にしてもおなじことで、まさかこんな山の温泉場の吊橋で立ち往生しているのが、自分の社の電話交換手だとは思わなかった。

「こっちだって驚いてるよ。ここへは、よくくるの？」

「いいえ、今度が初めてです。ほら、うちの雑誌に、この紹介記事が出たでしょう。あれは、何月号だったかし

ら」

「三月号だよ」

と清里は即座にいつて、目をしばたいた。その記事は、彼が自分で書いたものだったが、それはいわずに、

「あれは？」

と、まだ橋の上にうずくまっている一人を指さして訊いた。

「あれもうちの社の人？」

「いいえ」

妙子はそう答えただけで、

「神永さん、もういいわよ。いらっしやいな。思ってたほどこわくなかったわ」

と、大声で橋の上の仲間に呼びかけた。

けれども、その女は立ち上ろうともしない。ふと、はるか下を流れている谷川の音が、急に高まったような気が清里にはした。

「……どうしたんだろう」

「……どうしたのかしら」

と妙子もいつて、

「神永さん、どうしたの？ 早くいらっしやいよ」

と手招きをした。それでも、橋の上に残された仲間は、低くうずくまったまま動かない。